

7 総括

金比羅山古墳出土資料は、副葬品と埴輪類の良好な一括資料として以前から注目され、川西宏幸氏（川西 1978 ほか）や和田晴吾氏（和田 1987）の研究では、円筒埴輪ひいては古墳編年における中期前葉の標識資料の一つと位置づけられてきた。本章では、その後も蓄積されてきた前・中期古墳の編年研究を鑑みて、金比羅山古墳の副葬品と埋葬施設、円筒埴輪編年における位置づけを改めて行う。

また、金比羅山古墳は南山城地域最大の首長墓群である久津川古墳群において、最大の前方後円墳である久津川車塚古墳の一世代前の首長墓である。歴史的な位置づけについても若干の考察を行う。

（1）副葬品・埋葬施設編年における位置づけ

近年深化している副葬品及び埋葬施設の編年研究の動向を参照しながら、改めて副葬品と埋葬施設の年代観を検討する。

①銅鏡

斜縁二神二獣鏡は「漢鏡 7 期」（岡村 1993）に位置づけられる。斜縁神獣鏡編年で古相か新相かは、論者によって評価が分かれる（村松 2004・実盛 2009）が、製作時期の暦年代は、おおまかに 3 世紀前半として問題は無いであろう。したがって、製作から金比羅山古墳への副葬まで 100 年以上の期間が想定される。

②刀剣

全ての資料が小型で、「短剣」・「短刀」に分類される。日本列島での短刀の製作開始は前期中葉（豊島 2007・2019）とされ、中期にも継続する。

③鉄製農工具

「概要」で、金比羅山古墳の時期が中期（「5 世紀」）に下る根拠とされたのが、第 1・2 埋葬施設から出土した蕨手刀子である。しかし、その後の研究の進展により、前期に遡る蕨手刀子の出土事例が確認されたため、蕨手刀子が出土した古墳が、自動的に中期に比定されるわけではなくなった（河野 2018 ほか）。現在の編年観では、前期末に蕨手刀子がまとまって出てくるとされる（魚津 2020）。また、鉈は屈曲する鉤形のタイプが含まれるが、このタイプも前期末以降に出現し、特に多種多様な農工具が出土する古墳でよく出土するとされる（野島 2011）。

④石製玉類

翡翠製勾玉は緑色系で透明度がある丁字頭勾玉である。両面穿孔で穿孔部はすり鉢状を呈する。前期中葉から末葉に位置づけられる。碧玉製勾玉は片面穿孔で穿孔部が小さく、前期後葉以降に位置づけられる。緑色凝灰岩製勾玉は、山陰の製作技法を導入して畿内で製作されたと考えられるもので、

中期前葉に位置づけられる^(注1) (大賀 2002・2010)。また、勾玉は大きさと形態が2個ずつそろうが、こうしたセット関係は中期古墳に認められるという^(注2) (米田 2020)。

碧玉製管玉は花仙山産と考えられ、前期後葉から末葉に特有の領域 J F b の規格に該当する (大賀 2010)。

⑤ガラス小玉

詳細は附編に記載されているが、ガラス小玉はカリガラスで、中アルミナタイプの Group PI に属する。そして、Group PI をさらに細別すると「紺小」タイプに属する。インド・パシフィックビーズに包含されるガラス玉で、日本列島における最古のガラス玉の一つとして弥生時代中期初頭から中葉、後期前葉の北部九州と近畿北部でみられる。Group PI は古墳時代前期に一度姿を消し、中期に再流入するが、そのタイプは「紺大」・「紫栗」タイプであるという (大賀 2020)。したがって、「紺小」タイプである金比羅山古墳出土ガラス小玉は非常に珍しい事例で、確実な類例が乏しく時期決定の手段にはならない。

⑥埋葬施設

第1埋葬施設は、粘土槨に割竹形木棺を収める構造である。棺床粘土の設置前に墓壙南端を溝状に掘削して磔を充填するが、磔敷は形成されない。磔敷の無い粘土槨は、前期後葉から存在し中期まで継続する。第2埋葬施設は、通有の粘土槨ではないが、墓壙底の四周に溝を巡らせ磔を充填する。磔敷の形骸化とも捉えられる。こうした磔敷施工の省力化は、前期末に認められる (上田 2015)。

⑦小結

上記の検討から金比羅山古墳副葬品及び埋葬施設の時期を比定する。まず、鉄製農工具と埋葬施設の特徴から、第一・二埋葬施設の両方とも前期末以降と考えられる。そして、第一埋葬施設に副葬される緑色凝灰岩製勾玉は、中期前葉にだけ特徴的に存在する遺物で、時期比定の重要な指標となり得る。

この他の副葬品では、突出して古いのは製作年代が3世紀に遡る斜縁二神二獣鏡であるが、この資料は伝世が想定される。また、翡翠製勾玉も中期にはすでに製作が終了している器物であるが、これも、製作から副葬までの期間を長く見積もれば、副葬の時期が中期に下がっても矛盾はない。そのほかの副葬品は鉄刀、鉄剣であるが、前期中葉から中期までの広い範囲に収まるため、細かい時期比定には適さないようである。

したがって、金比羅山古墳の副葬品には、古い要素を示す遺物が若干含まれるものの、帰属時期を中期初頭以前に遡らせる積極的な根拠は乏しい。時期比定の根拠資料は従来とは異なるが、これまでの見解どおり、中期前葉に比定するのが妥当と判断する。

(古川)

(2) 円筒埴輪編年における位置づけ

金比羅山古墳では、埴裾より埴輪列が検出され、多くの円筒埴輪が出土している。埴輪列から出土したもので、全形を復元できる資料はないが、古墳周辺から出土した埴輪棺は形態的・技法的属性が埴輪列のものと一致しており、報告編で述べたように出土状況からも時期差はなく、同一の埴輪製作集団によって製作されたものと考えられる。ここでは、埴輪棺を含めた円筒埴輪をもとに周辺地域と比較しながら、編年の位置づけを検討するものとした。

①金比羅山古墳出土円筒埴輪の特徴

金比羅山古墳出土の普通円筒埴輪は、4条5段で、円形透孔を2孔縦列状に配置する。朝顔形円筒埴輪も4条5段ではあるが、円形透孔を2孔千鳥状に配置する。外面調整は、一次調整タテハケと二次調整ヨコハケが施される。二次調整ヨコハケには、静止痕が明瞭に残るB種ヨコハケと静止痕が明瞭に残らないヨコハケが認められる。突帯設定技法には凹線技法が用いられている。底部高や突帯高に非常にまとまりがあり、全体の底部高は14.8～18.2cmで、多くの資料が16～18cmにまとまる。全体の突帯高は10.9～13.6cmで、口縁部高の分かる資料は少ないが、全体が9.8～12.8cmで、多くが11～12cmにまとまる。統一性の高い生産を行っているといえる。B種ヨコハケを施し、黒斑を伴うことから、従来の研究では川西Ⅲ期に位置付けられている（川西 1978）。

②南山城地域の円筒埴輪

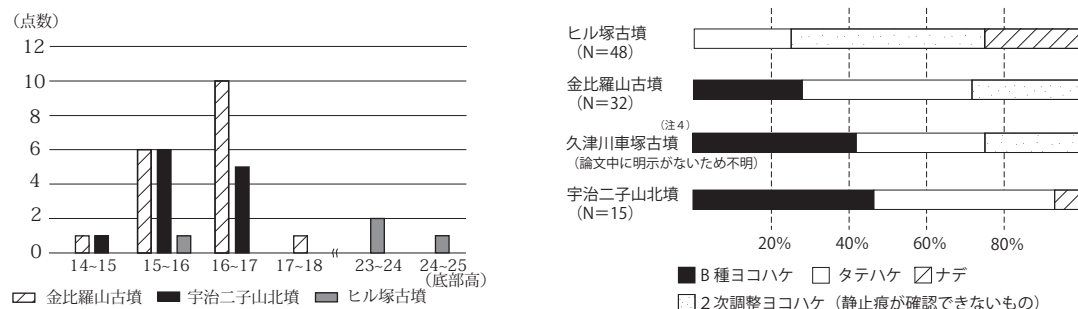
南山城地域で、金比羅山古墳と時期を前後する時期の円筒埴輪の比較が可能な遺跡としては、川西Ⅱ期に比定される八幡市女郎花遺跡、八幡市ヒル塚古墳、宇治市庵寺山古墳、川西Ⅲ期に比定される宇治市宇治二子山北墳、城陽市久津川車塚古墳が挙げられる。Ⅱ期の特徴は高い底部高である。Ⅱ期古相では、突帯間隔の2倍の高さである底部高が、Ⅱ期新相には徐々に低くなっていく（廣瀬 2006・2015）。Ⅲ期の大きな特徴は、B種ヨコハケの出現となっている（川西 1978）。これらの点に注目して概観していく。

女郎花遺跡出土の埴輪は、底部高約12～21cmで、突帯間隔10～12cm、口縁部高は約7cmである。全体形状は不明であるが、透孔は半円形、方形、円形である。外面調整は一次調整タテハケ、静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケを施す。

ヒル塚古墳出土の埴輪は、底部高23.6～24.5cmで、一点のみ15cmのものがある^(注3)。突帯間隔14～16.2cm、口縁部高は8.3～10.6cmと16.9cmに分かれる。全体形状は、透孔は半円形、方形、円形である。外面調整は一次調整タテハケ、静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケを施す。

庵寺山古墳出土の埴輪は底部高16～17cm、突帯間隔13～14cm、口縁部高は約10cmである。6条7段で、透孔は半円形、方形、三角形、円形で、縦列状に配置する。外面調整は一次調整タテハケと静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケを施す。

宇治二子山北墳出土の埴輪は底部高約15～17cm、突帯間隔約13cm、口縁部高は約11～13cmである。全体形状は不明であるが4条5段に復元される。透孔は円形と方形が確認でき、2孔縦列状に配置す



第 29 図 南山城地域出土円筒埴輪の底部高と外面調整

る。外面調整は一次調整タテハケと B 種ヨコハケを施す。

久津川車塚古墳出土の埴輪は詳細な分析がなされており（原田 2015）、底部径によって KL 群、KS 群、特大群に分類されている。KL 群は底部高 14 ～ 17.5cm、突帯間隔 15cm、口縁部高は 17cm である。4 条 5 段で、透孔は円形で、二孔千鳥状に配置する。外面調整はタテハケ、静止痕の明瞭に残らない二次調整ヨコハケや B 種ヨコハケを施す。KS 群は底部高約 12 ～ 16cm、突帯間隔が約 13cm、口縁部高約 12cm である。

③底部高と外面調整の比較（第 29 図・第 30 図）

上記で挙げたようにⅡ期の埴輪の特徴が底部高と突帯間隔と口縁部高の割合の変化である。また、Ⅲ期の特徴は B 種ヨコハケの出現となる。上記で挙げた資料をもとに、資料が残りやすい底部高の高さと外面調整から編年を検討する。^(注 4・5)

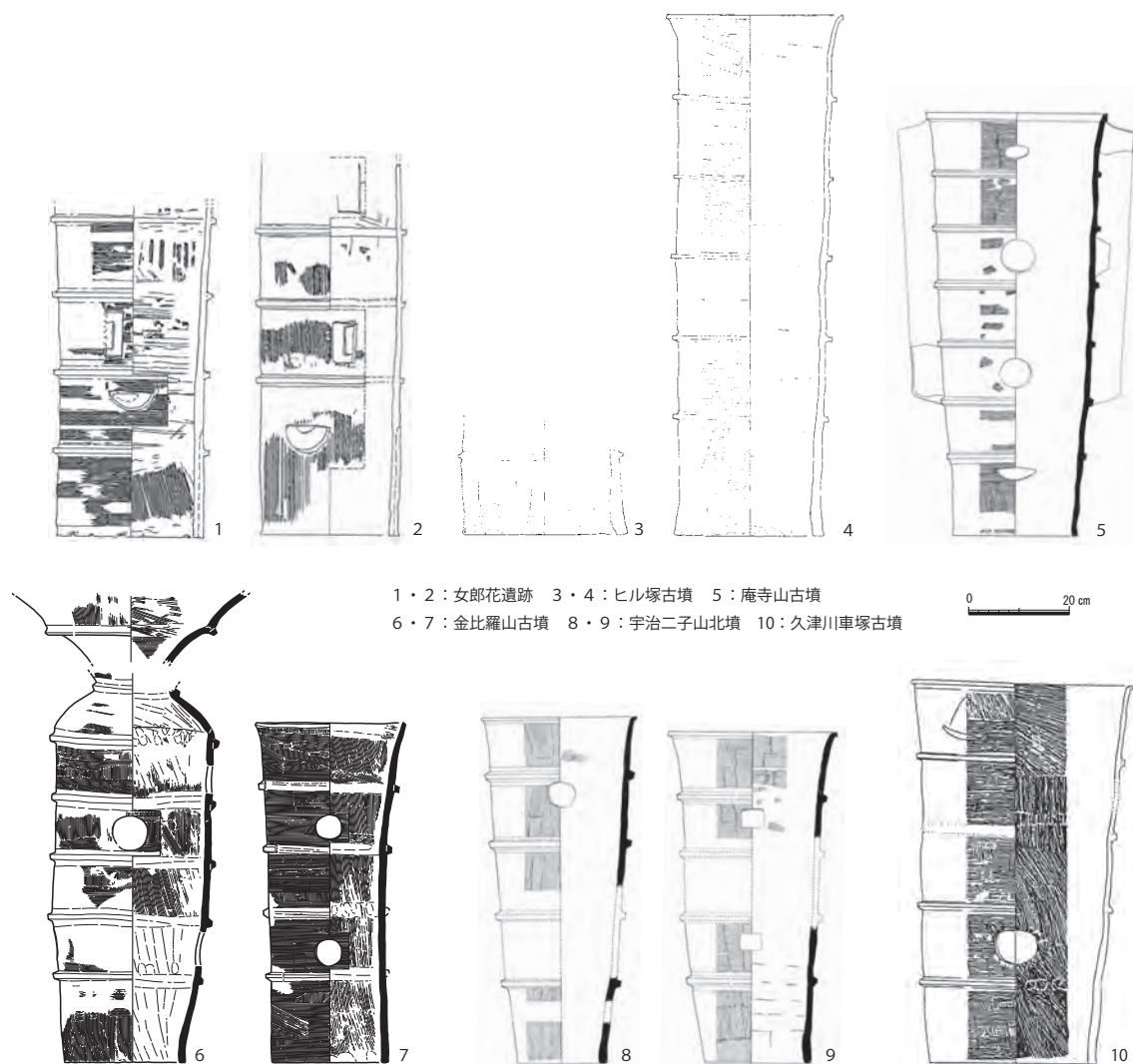
南山城地域において、Ⅱ期の古相とされる女郎花遺跡やヒル塚古墳の底部高が 20cm を超える資料が多い。短いものもほかの底部高の半分に設定されている。Ⅱ期新相になると 17cm 程度と低くなり、Ⅲ期に比定される宇治二子山北墳では、やや縮小化され、久津川車塚古墳の資料では、約 15cm 程度にまとまるようになる。金比羅山古墳の資料はⅡ期新相とほぼ同一の高さである。

外面調整をみるとⅡ期古相では、静止痕の明瞭に残らないヨコハケとタテハケ、ナデが認められる。Ⅱ期新相の状況は不明であるが、金比羅山古墳では B 種ヨコハケは 3 割程度である。Ⅲ期の宇治二子山北墳や久津川車塚古墳では、割合が 4 割程度まで施されるようになる。

このような変化をしていく中で、金比羅山古墳の資料は、底部高でいくとⅡ期新相と変わらない高さをもつものの、B 種ヨコハケが 3 割程度まで普及している。B 種ヨコハケを施さない庵寺山古墳より新しく、割合が増加していく久津川車塚古墳や宇治二子山北墳より古いとする従来の位置づけと同じものとなる。

④小結

周辺の古墳のみではあるが、時代を前後する資料を概観したところ、Ⅱ期の特徴といえる突帯間隔の二倍の高さになるように設定される底部高が漸次的に低くなっていく様相とⅢ期の B 種ヨコハケが出現する様相を南山城地域で確認できた。これらの資料の中で全体形状や透孔の配置、底部高など金比羅山古墳の埴輪と類似点の多い資料としては、宇治二子山北墳が挙げられるが、宇治二子山北墳



第30図 II・Ⅲ期の南山城地域出土円筒埴輪 (S= 1/15)

では、2次調整ヨコハケが、静止痕が明瞭に残るB種ヨコハケのみであり、金比羅山古墳の円筒埴輪より新しいものと考えられる。

金比羅山古墳の埴輪は南山城地域における中期的な様相が出現する時期の資料であり、山城地域の中期前葉の代表的な資料であることを再確認することができた。一方で、金比羅山古墳出土埴輪の中には、古い要素を残す資料もある。口縁部高が低い円筒埴輪や、今回は検討できなかった形象埴輪で、笠部に1条沈線で上下段交差する蓋形埴輪などである。これらの特徴は、Ⅱ期からⅢ期にかけての円筒埴輪の特徴であり、同様な状況は、乙訓地域の円筒埴輪でも確認されている（角 2019）。本資料は、南山城地域における古墳時代中期の埴輪の生産・製作地術の導入を考える上で、重要な資料と評価できる。^(注6)

（北山）

（3）金比羅山古墳の歴史的評価

（1）・（2）の副葬品及び埴輪の検討から、金比羅山古墳の時期は古墳時代中期前葉に位置づけられ、

既往の編年では、和田晴吾による編年の六期（和田 1987）、広瀬和雄による編年（通称「前方後円墳集成編年」）（広瀬 1992）の 5 期及び大賀克彦による編年の中 I 期（大賀 2002）に該当する。この検討を踏まえて、改めて地域社会及び近隣地域との関係から、金比羅山古墳の位置づけを試みる。

金比羅山古墳は、久津川古墳群北支群（広野支群）に属し、前代の庵寺山古墳に続く首長墳である。同地域では、金比羅山古墳の後は後期の坊主山 1 号墳まで、首長墳の造営がしばらく途絶える。また、中央支群の西山古墳群、南支群（富野支群）の梅の子塚古墳群の造営も前後して停止する。

金比羅山古墳の次の段階は、南山城地域最大の前方後円墳である久津川車塚古墳に代表される、近畿地方中央部でも屈指の首長墓群が現在の城陽市平川・久世に形成された。和田晴吾は、この首長墓群が、盾形周濠を有する大型前方後円墳と、従属する方墳や帆立貝形墳から構成されることに注目し、大首長とこれを補佐する首長の墓と推定した（和田 1988）。そして、その系譜を、前代に造営が途絶える広野、富野、西山の古墳にたどっている。さらに、こうした権力の集中の背景には、「ヤマト王権」の地方政策があり、この地域の内在的な契機だけによるものではないと想定した。和田の想定背景は、中期前葉以前の久津川古墳群の首長墳の埋葬施設が竪穴式石槨を採用せず、簡素な小型のものが主体であったこと等による。そして、前方後方墳が一定の割合を占めることも指摘している。

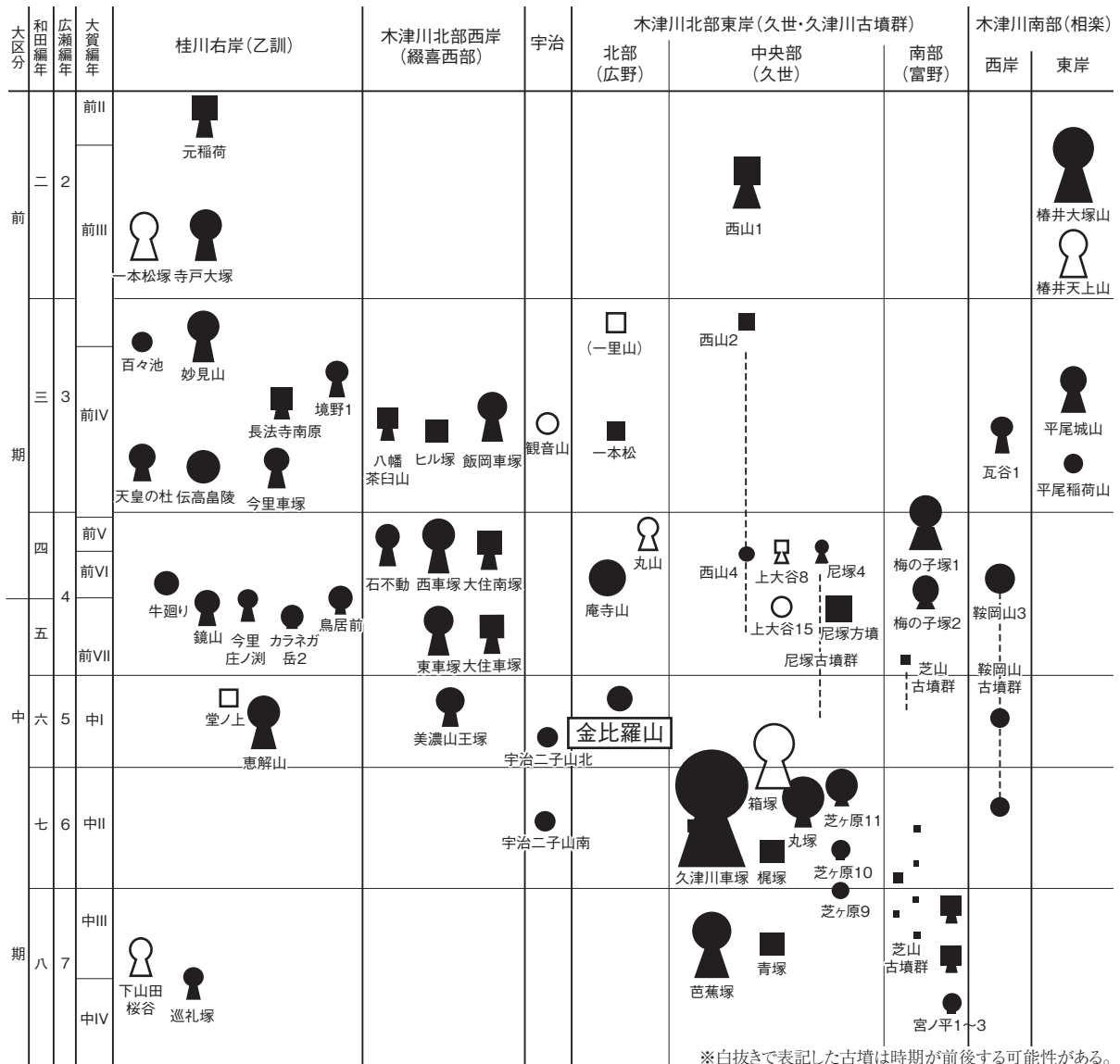
そして、岸本直文は、前期初頭の芝ヶ原古墳とそれに続く西山 1 号墳が前方後方墳であること、さらに芝ヶ原古墳から近江系土器が出土し、西山 1 号墳の副葬品組成が墳丘規模の割に簡素であることに注目し、久津川古墳群が形成されはじめた古墳時代前期の久世地域は、近江など東方社会との関係が強く、当初は「倭王権」とは強い関係を持たない地域と位置づけている。そして、「倭王権」との関係が強まるのは、庵寺山古墳や梅の子塚古墳群が築造される時期以降と位置づけた（岸本 2014）。

こうした前後の時期の状況から、金比羅山古墳は、地域の独自性が強い段階から、ヤマト（倭）王権との関係が強固となって大型前方後円墳が登場する段階までの、過渡期に属するといえる。

ここで、金比羅山古墳の副葬品を改めて見ると、農工具、玉類、中国鏡が主で、棺外に刀剣が副葬されるとはいえ、甲冑や鉄鏃といったその他の武器、武具類は含まれないことがわかる。

金比羅山古墳の造営時期と前後する前期末から中期前葉にかけて、桂川右岸地域の鳥居前古墳（広瀬編年 4 期）、木津川上流西岸部の鞍岡山 3 号墳（4 期）、木津川北部西岸の石不動古墳（4 期）、美濃山王塚古墳（5 期）、宇治地域の宇治二子山北墳（5 期）といった山城地域の首長墳では、甲冑の副葬事例が増加する（阪口 2019）。すなわち、同時期の他地域の首長墳では、中期特有の「武」の要素が既に顕在化していると言える。しかしその一方、金比羅山古墳の副葬品にはこのような特徴が希薄で、非軍事的な首長像が想定される。^(注8)

金比羅山古墳の次に築造された可能性のある箱塚古墳の様相が残念ながら不明ではあるが、広瀬編年 4 期に既に甲冑副葬が認められる他地域と比べると、当地域のいわば「武装化」は、1 世代もしくは 2 世代遅れていたと見込まれる。したがって、金比羅山古墳から、鉄製甲冑を始めとする武器武具を多量に副葬し長持形石棺を埋葬施設とする大型前方後円墳・久津川車塚古墳の築造に至るまでには、この地域における権力構造の急激かつ大きな変化が想定されるのである。その背景には、和田の指摘したとおり「ヤマト（倭）王権」による外部からの働きかけがあったのであろう。



第31図 金比羅山古墳と近隣地域の古墳

一方で、金比羅山古墳からは、他地域との交流も見受けられる。第二埋葬施設の円筒棺の類例は、南山城地域だけでなく、奈良盆地北部や北葛城郡の古墳でも確認されている（犬木 2020）。そして、この時期の短刀を検討した豊島直博（豊島 2019）は、分布状況から、製作主体を南山城地域または北葛城郡の馬見丘陵古墳群といった、前期後葉に台頭した集団と想定する。また、同様に農工具を検討した魚津知克（魚津 2019）は、手鎌の形態に注目し、板状の手鎌は、摂津、山城、丹波といった地域に分布し、折返しのある型式の手鎌は、大和及び河内地域に分布することを指摘している。第二埋葬施設に副葬された手鎌は後者のタイプで、副葬品とともに被葬者が出身地に帰葬されたと仮定すれば、死後に鉄製品を入手したとしても、大和または河内との生前の関係が深かったことを反映しているといえる。円筒棺の製作主体を検討する上でも、鉄製品の様相との近似は、興味深い現象である。

さらに、第二埋葬施設出土の農工具には、他にも重要な資料が含まれる。刀子を転用して製作された2点の鉋である。この資料は、古墳に副葬される鉄製農工具には、祭器として製作されたものだけではなく、実用品も含まれていたことを示唆する資料である。さらに踏み込めば、実用の生産用具で

ある鉄製農工具の生産から流通についても、地域間関係が反映されていた可能性があると考えられる。

このように、金比羅山古墳は、従来注目されてきた編年の基準としてだけでなく、古墳時代中期の地域社会及び地域間関係を検討する上でも、示唆的な内容を有する古墳といえる。

(古川)

おわりに

昭和 39 年（1964）に実施された金比羅山古墳の発掘調査は、京都府教育委員会直営の発掘調査としては初期の事例である。本書の作成作業は、先人の努力と苦勞に思いを馳せながら進められた。多くの人が関わって世に出ることとなった本書が、今後、広く活用されることを期待する。

なお、金比羅山古墳出土資料は、令和 3 年 3 月に京都府指定有形文化財（府指考第 39 号）に指定された。今後、より良い保存・活用を模索していきたい。

(注)

(1) 特に石製玉類の編年観については、大賀克彦氏の御教示を得た。

(2) ただし、米田克彦（米田 2020）によると、「同質同形で 2 個一対」とされるため、碧玉製と緑色凝灰岩製のセットである本事例は、やや異質であるかもしれない。

(3) 第 1 突帯まで残存している資料は、多くないが、底部高が 20cm 以上になる資料が多数確認されている（北山 2017）。

(4) 第 29 図は、原田 2015 掲載のグラフをもとに北山が作成した。

(5) 第 30 図の出典は以下のとおりである。1・2：八幡市教育委員会 1999、2・3：北山 2017、4：宇治市教育委員会 1990、5・6：宇治市教育委員会 1991、7：城陽市教育委員会 1986

(6) 金比羅山古墳出土円筒埴輪の評価については、泉真奈、犬木努、木村理、村瀬陸、廣瀬寛の各氏から御教示を得た。

(7) 第 31 図における各古墳の編年の位置づけは、宇野 2017、桐井・北山・菊池・繰納 2020 を参照した。

(8) 人骨が遺存しないため、被葬者の性別は詳細不明であるが、鉄鏃、甲冑、鍬形石といった男性特有の副葬品（清家 2010）が一切含まれないことは、被葬者像を検討する上で示唆的である。

参考文献

宇治市教育委員会 1990 「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第 15 集

宇治市教育委員会 1991 『宇治二子山古墳発掘調査報告』『宇治市文化財調査報告』第 2 冊

城陽市教育委員会 1986 「久津川車塚古墳・丸塚古墳発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第 15 集

八幡市教育委員会 1999 『女郎花遺跡第 3・5 次発掘調査概報』『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第 28 集

上田直弥 2015 「粘土槨の展開過程とその画期」『考古学研究』第 62 巻 3 号 考古学研究会

魚津知克 2019 「鉄製農工具副葬における前期と中期のはざま」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第 54 集

- 魚津知克 2020「鉄製農工具の分類と様式設定」『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ～副葬品による広域編年再考』中国四国前方後円墳研究会
- 宇野隆志 2017「京都盆地における古墳と集落の動態」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館
- 梅本康広 2016「山背地域の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会
- 大賀克彦 2002「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 福井県清水町教育委員会
- 大賀克彦 2010「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価－半島系管玉の出土を中心に－」『東大寺山古墳の研究』
- 大賀克彦 2020「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしへの河をのぼる』古川登さん退職記念献呈考古学文集
- 岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗学博物館研究報告』第55集
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻第2号 日本考古学会
- 河野正訓 2018「農工漁具」『前期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会
- 岸本直文 2014「芝ヶ原古墳の位置づけをめぐる」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第68集－芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書－』
- 北山大熙 2017「埴輪からみた八幡市ヒル塚古墳」『畿内の首長墳』立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
- 桐井理揮・北山大熙・菊池 望・繰納民之 2020「西山1・2号墳出土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館報』第23号
- 阪口英毅 2019「鳥居前古墳出土甲片の意義」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第54集
- 実盛良彦 2009「斜縁神獣鏡の変遷と系譜」『広島大学考古学研究室紀要』第1号
- 角早季子 2019「鳥居前古墳出土埴輪の編年的位置付けについて」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第54集
- 清家章 2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 豊島直博 2007「古墳時代前期の刀装具」『考古学研究』第54巻1号 考古学研究会
- 豊島直博 2019「古墳時代前・中期の短刀」『鳥居前古墳』大山崎町埋蔵文化財調査報告書第54集
- 野島永 2011「鉄製農工漁具」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社
- 原田昌浩 2015「古墳時代中期の埴輪生産」『考古学研究』第61巻第4号 考古学研究会
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
- 廣瀬 覚 2006「五色塚古墳と前期後葉の埴輪生産」『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会
- 廣瀬 覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 村松洋介 2004「斜縁神獣鏡研究の新視点」『古墳文化』創刊号 國學院大學古墳時代研究会
- 米田克彦 2020「中四国地方における中期古墳の玉類副葬」『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ～副葬品による広域編年再考』中国四国前方後円墳研究会
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐる」『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会
- 和田晴吾 1988「南山城の古墳－その概要と現状－」『京都地域研究』4 立命館大学人文科学研究所